

「タフな」学環長 須藤 修 新学環長



2012年4月、須藤教授が学環長に就任しました。
インタビューでは、課題と向き合う強い姿勢が印象的でしたが、
楽しいオマケのお話も添えていただき、
剛柔併せ持つツワモノの風格を感じました。
これはまさに濱田総長唱えるところの「タフさ」では・・・

今の情報学環をどのように ご覧になっていますか

情報学環の使命は、『情報』をキーワードに、あるいは『情報学』という形で、社会・文化や理工学的なテクノロジーを研究し発展させること、またその高度な人材

を養成することであると考えています。同時に情報学環は流動システム(東京大学の他の研究科・研究所等の教員が数年の期間をもって情報学環に身分を異動する)が大きな特徴ですので、流動元となる部局との関係が大変重要です。そうした関係部局との協調、共同で様々な新しい試みしなければならぬという組織でもあります。2000年に情報学環ができて、今年で13年目を迎えました。歴代の学環長が尽力され、関係部局と非常にいい関係を築いてこられ、ここまで発展させていただいたことに、まず感謝したいと思います。各教員、各大学院生には、基本的によく頑張ってきていただき、基盤は徐々に固まりつつあると思います。

しかし課題がないわけではありません。これは情報学環のみならず、あらゆる国立大学法人が今抱える問題ですが、少子高齢化に伴い、政府が社会福祉や医療の方に財源を固定的に支出せざるを得ない状況になり、今後、文教予算というものはなかなか増額しにくい環境になっています。情報学環も財政的にかなり厳しい状況に置かれていると言わざるを得ません。かつては運営交付金が核で、新たにチャレンジするような活動については、いろいろな外部資金を獲得して運営するというのが基本でしたが、今後は、基本は自分で財源を確保し、むしろ運営交付金はその不足分を補うものであるという、まったく逆の認識をしなければならない時代に突入しつつあります。こうした渦中において、我々はそれまで培ったものをベースにして、さらに外部との関係を強化し、財政的な安定を獲得しない限り、運営及び未来の展望はなかなか困難な状況にあると言えます。

そうした厳しい状況の中での 学環長の役割をどのようにお考えですか

情報学環には優れた先生方が多数いらっしゃいます。モジュールと言っていると思いますが、そのモジュール単位が非常に活発に活動できるように支援するのが学環長の仕事だろうと思います。必要な措置を講じて、自由活発な研究・教育が行えるように環境を整えたいと考えています。学環はそういう優れた先生方、学生たちのイン

タラクション=相互作用で成り立っています。情報学環という名前の由来は学をめぐるネットワークという意味ですから、そのネットワークを活性化させるのが自分の使命だと思います。ポテンシャルをいっぱいお持ちの先生方や学生たちの相互作用と、それによってできる新たな何かを支援しますので、教職員や学生の方々には、研究成果・教育成果として結実させ、社会に貢献できるように頑張っていたきたいと希望しています。

学生へのアドバイスはありますか

これは入学のガイダンスでも言ったことですが、大学院というのは、もともと苦しいところです。論文を書く時は誰でも切羽詰まって苦しくて仕方ない。だけど頑張って、そこから逃げないで向かって行ってくださいということを強調したい。向かって行けば逃げるよりは苦しくない。その中から何かつかむものがあると思います。探査機「はやぶさ」が、数々の困難に遭遇しながら帰還しましたよね。私はあの「はやぶさ」プロジェクトのコンピューター分析を担当した会津大学の先生方ともお付き合いがありますが、彼らは何度も諦めかけるようなことに見舞われながらも、めげずに「はやぶさ」を帰還させた。人生そんなもんだと思います。論文を書くことはかなり困難を伴うし、先生方からも厳しい指摘があるだろうけれど、それをなんとか役立てるように考える。そこにはいずれ後々まで役に立つようなヒントもいっぱいあるんです。

それともう一つ言いたいことは、完璧主義者になるなということです。なんでも八割、100の内80でよしとすると。そして不足分を常に意識しろと。100%のものを書こうとすると書けなくなる。優秀な人ほどスランプに陥ります。僕の学生時代もそれで書けなくて苦しんでいる仲間がいました。僕みたいに大ざっぱに考えられなくて、きっちりやらないと気が済まない。でも、きっちりやろうとすると大体パフォーマンスは落ちますよ。課題が残ったって、それは次の研究や論文でチャレンジしてその不足分を補えばいい。徐々にレベルを上げて行くという気持ちでやればいいと思います。

では、今までのお話の不足分を補うとしたら?

まだAKB48の話をしていませんでしたね(笑)。僕は誰が好きだとか、女性としてチャーミングとかじゃなくて、塊がいいと思っているんです。若い人がなんか頑張って打ちこんでいる姿を見て、こっちはやらなくちゃ、と元気が出る。オヤジの発想ですよ(笑)。要するに高校野球のノリです。ただ、予測はよく当たっていて、総選挙結果は毎年当てているんですよ。意外と何の役にも立たないような、どうでもいことに勤が働くんですね。(笑)

ITU-T アカデミックメンバー加盟調印記念 マルコム・ジョンソン氏講演会

東京大学は、2012年3月、国際連合の下部組織である国際電気通信連合の電気通信標準化部門 (ITU-T、本部：スイス ジュネーブ) にアカデミックメンバーとして加盟した。これを記念し、3月12日、Malcolm Johnson氏が来日し、山上会館で調印式と一般公開の講演会が開催された。

ITU-Tは電気通信に関する国際標準の策定を行う国際機関であり、これまで、モデム、ADSL、ISDN等のアナログ・デジタルのデータ通信などの標準化がなされている。Johnson氏は、2006年にITU-T局長として選任され、2007年より現在まで、電気通信標準化局(TSB)局長として活躍されている。

調印式は、ITU-Tで標準化活動を行っている情報学環の教職員が企画準備を担当。情報理工学系研究科の萩谷研究科長と浅見先生、情報学環の石田学環長(当時)、須藤先生(現学環長)、越塚先生、中尾先生が見守る中、情報担当の松本理事がJohnson氏より加盟証明書を受理し、円滑に遂行された。続く昼食会では、総務省通信規格課の布施田課長、情報通信技術委員会(TTC)の前田氏も加わり、本学教員の標準化への取り組みの紹介や今後の大学における標準化活動、教育の重要性など多岐にわたる議論が、終始和やかな雰囲気の中、展開された。

講演会では、始めに布施田課長より本学加盟の祝辞を賜り、我が国のITU-Tへの取り組みの概要、本学教員の貢献について言及いた

だき、今後の本学の標準化活動への更なる貢献を期待する旨、激励を受けた。

続くJohnson氏の講演では、スマート・グリッド、クラウド・コンピューティング、IoT(Internet of Things)、サイバー・セキュリティ、災害時の緊急通信という新しいICT分野における標準化活動が紹介された。そして、アカデミックメンバーには他の企業など同等の貢献の機会があることや、大学発の標準化の重要性、また、学生の国連組織におけるインターンシップの可能性についても説明があった。加えて、2013年4月に京都で開かれるカレイドスコープ学会イベントの案内もあり、大変興味深い内容であった。

本講演会は、本部および情報学環と情報理工学系研究科の共催により実現した企画であり、情報学環の他部局との連携という意味でも有意義なイベントとなった。

情報学環は今後、本学のITU-Tアカデミックメンバーシップの事務局として活動し、本学の電気通信分野の標準化へ中心的役割を担って行く予定である。(准教授・中尾彰宏)



「MELL EXPO 2012」開催



紙芝居型プレゼンテーション「PANEELI」

3月10日～11日、「MELL EXPO 2012」が東京大学一条ホールで開催された。MELL EXPOは、2007年以來、一般の人々のメディア表現や、学びとリテラシーのための広場づくりを目指して全国展開を

してきたメル・プラッツ (MELL Platz)の年間シンポジウム。メル・プラッツは、当初の予定どおり5年間の活動期間を経て11年度で終わるため、今回の最終シンポジウムは、5年間をふり返って未来を展望することを中心におき、デジタル・ストーリーテリングのセッション「声なき想いに物語を」や、内外各地の多様な実践や理論の紙芝居型プレゼンテーション「PANEELI」を実施し、2日間で、のべ400名近い参加者とともに、にぎやかに開催された。メル・プラッツは、前身のメル・プロジェクト (MELL Project) 以来、数多くの学環・学府の関係者、同窓生が中心となって、草の根的に日本のメディア・リテラシーの拠点を形成してきた。12年度後半には、ポスト・メル・プラッツの新しい活動が姿を現す予定である。(教授・水越伸)

国際シンポジウム 「現代韓国文化のアジア的還流と 地域アイデンティティの可能性」

3月17日、福武ラーニングシアターで、情報学環現代韓国研究センター主催の国際シンポジウム「現代韓国文化のアジア的還流と地域アイデンティティの可能性」が、約100名の参加者を得て開催された。テッサ・モーリス＝スズキ オーストラリア国立大学教授による「戦争の文化、平和の文化：韓国・日本・東北アジアの冷戦から脱冷戦への移行」という基調講演に引き続き、第1セッション「『韓流』と『在日』の狭間」(司会：木宮正史副センター長)と第2セッションのラウンドテーブル「現代韓国文化の可能性をめぐって」(司会：姜尚中センター長)が行われた。

シンポジウムでは、とくに、現代韓国ポピュラーカルチャーの越境的循環という現状と、東アジアにおける地政文化的な変化への影響に関して、多角的な討論が展開された。(特任助教・金伯柱)



東京大学総長賞～学府から2名が受賞

平成23年度第2回学生表彰「東京大学総長賞」に、学際情報学府から次の2名が選ばれ、3月22日、小柴ホールで開催された授賞式において表彰された。
春の東京大学総長賞は、学業において、研鑽に励み、他の学生の範となった個人もしくは団体、または学界等により優れた評価を受け、本学の名誉を高めた個人若しくは団体に贈られる。

玉城 絵美

(暦本研・博士課程修了)



「PossessedHand」と呼ぶ、電気刺激によりヒトの手を制御する技術について研究した。研究成果はACM SIGCHI 2011やIEEE Life Sciencesなどのトップカンファレンス/ジャーナルで発表されたほか、ABC News, New Scientist, MIT Technology Review, Popular Scienceなどの国際的メディアでも多く取り上げられた。さらに米国TIME誌による、「The 50 Best Inventions of 2011」に選出されるなど、国際的にも高い評価を受けた。

武井 祥平

(苗村研・修士課程修了)



修士論文としてまとめられた「リール式伸縮アクチュエータの提案と3次元形状表現システムへの応用」に関する研究で、東京大学学生発明コンテストや電子情報通信学会から表彰されたほか、東京大学制作展において担当した展示空間デザインが日本サインデザイン協会奨励賞を受賞、「年鑑日本の空間デザイン2012」に掲載。このほか照明デザインでの受賞もあり、新たな技術の創出と優れたデザインの両立を学際的に探究してきた実績が高く評価された。

着任教員自己紹介

松田康博 [まつだ やすひろ] 教授



中国と台湾を中心に東アジアの国際政治を研究しています。台湾は、西欧諸国並みの規模と「国家性」を有していながら、世界の大部分の国家と外交関係がなく、国連をはじめとした代表的な国際組織からも排除されていますが、それにもかかわらず、無視できない役割を果たしています。こうした国際関係の「例外的存在」から、どのような普遍的な示唆を得ることができるのかという関心もっています。ITASIAで「Introduction to Asian Studies: History and International Relations」と「Cross-Strait Relations」を開講しています。

岡本剛和 [おかもと よしかず] 准教授



総務省から着任しました。これまで、通信・放送の融合・連携に関する直近の放送法等の改正・施行や、電気通信サービスの料金規律、会計制度の見直し等に関与してきました。また、経済協力開発機構(OECD)事務局の情報通信担当エコノミストとしてパリで三年間勤務しました。これら実務経験も踏まえ知的貢献が出来ればと考えますが、新たに学術・学際への地平に立つということ、『水平的なフォワードルッキング』を心掛けることが目標です。

中村周吾 [なかむら しゅうご] 准教授



農学生命科学研究科から流動教員としてやってきました。出身は工学部で、生命科学分野における情報解析を研究テーマとしています。最近では、タンパク質やDNA・RNAなどの生体分子に、データマイニング、機械学習、分子シミュレーションなどの手法を適用して、配列、立体構造、相互作用、分子機能の情報解析や予測を行っています。情報学環で研究の幅をさらに広げていければと思っています。どうぞよろしくお願いたします。

修了式

情報学環教育部修了式 3月21日

情報学環教育部は、戦後すぐに生まれた新聞研究所に付属するジャーナリスト養成機関を起源とし、メディア、情報、コミュニケーションを学ぶ場である。23年度の修了式は情報学環本館2階教室にて、修了者15名を囲んで終始和やかな雰囲気で行われた。



学際情報学府学位記授与式 3月22日



午前中の安田講堂での大学全体の学位記授与式に引き続き、午後、福武ラーニングシアターにて、修士課程修了者76名、博士課程修了者8名(11月修了2名を含む)に学府長より学位記が授与された。終了後は、同会場において、優秀修士論文発表会が石崎雅人教授による総合司会のもと開催された。

人事異動

教員	採用	4/1	岡本 剛和 准教授 (総務省より)
		4/1	米 海鵬 助教
	配置換(転入)	4/1	松田 康博 教授 (東文研より)
		4/1	中村 周吾 准教授 (農学部より)
	配置換(転出)	3/31	田中 明彦 教授 (東文研へ)
退職		3/31	西 兼志 助教 (成蹊大学・准教授)
		3/31	金 成玫 助教 (北海道大学・准教授)
	任期満了	9/30	ロジャー・スミス 准教授
事務職員	配置換(転入)	4/1	渋谷 哲 学務係長 (本部総務課より)
	配置換(転出)	4/1	延原 和志 学務係長 (教養学部へ)
		4/1	島田 淳子 図書係主任 (医学部へ)

台湾メディアの歴史と現在

2月22日、林香里研究室は今年最初の「メディア研究のつどい」を福武ホールで開催した。今回のテーマは「台湾メディアの歴史と現在」。エスニック・メディアやジャーナリズム、マスメディア研究を専門とする仙台大学の林怡蕨(リン・イーシェン)准教授を講師として招き、多重民族・エスニック国家として知られる台湾のメディアについて知見を深めた。講演では1960～80年代における台湾メディアの歴史を概観し、現在の台湾メディアの動向から今後の課題にも触れた。海外のメディア事情を学ぶことで、グローバルな視点からメディアの在り方について考える有意義な研究会となった。(林研M2・林瑛香)

「占領する眼・占領する声」を論じる



3月4日、福武ラーニングシアターにおいてシンポジウム「占領する眼・占領する声 CIE/USIS映画とVOAラジオ」(主催:吉見俊哉研究室)が開催された。CIE/USIS映画『原子力の歩み』『将来の設計』の上映を含む二部構成で、それ

ぞれ「政策としてのメディア冷戦」「メディア冷戦を生きる」と題して、九つの報告とコメント、ディスカッションが行われた。戦後、アメリカの主導によって展開された原子力平和利用キャンペーンなど、特に今日において注目すべきテーマについて討論がもたれた。(学術支援専門職員・山内隆治)

CREST食に関わるライフログ 共有技術基盤シンポジウム報告



3月16日、福武ホールにおいて、標記シンポジウムを開催した。このプロジェクトでは、食事記録をメディア技術で支援する取り組みを行っている。食と情報処理という異なる分野に跨る課題であるものの、近年の健康への関心の高まりもあり、注目を集めている。当日は、プロジェクトを進めているメンバーである学環の相澤清晴教授(研究代表)、情報理工系の廣瀬通孝教授、医学系の佐々木敏教授、KDDI研究所の橋本真幸氏、大学発ベンチャーであるfoo.log Inc.の小川誠氏よりそれぞれ取り組みの報告が行われた。また、会場外のホワイエにて、各チームのデモも展示(写真)された。(教授・相澤清晴)

原発震災の現場を歩く

3月23日、工学部2号館にて、TVアーカイブ・プロジェクト第3回「みんなでテレビを見る会—東日本大震災とテレビ(1)原発震災の現場を歩く」が開催された。警戒区域内の様子をロードムービーの手法で克明に記録した「浪江町警戒区域 福島第一原発20キロ圏内の記録」(2011年、NHK)を上映した後、この番組を一人で撮影・編集・構成した福島広明氏に、制作の背景、警戒区域内の撮影の様子、放送にいたるまでの紆余曲折などを聞いた。会場からは「被災者の視点にたった報道姿勢に感銘を受けた」「生活を奪われた人びとの無念、それでもそこに息づく命のたくましさ伝わってきた」などの感想が寄せられ、震災報道をめぐる熱心な議論が行われた。(丹羽研M1・鈴木麻記)



受賞報告

■藤生慎(大原研D3)が、「被災地外の人材を有効活用する大震災時向け遠隔建物被害認定システム」に関する一連の研究成果に対して、11月

に開催された日本自然災害学会の学術発表優秀賞および日本地震工学会大会の優秀論文発表賞を受賞した。これら一連の研究は、大規模地震時に発生する莫大な数の建物被害認定調査を迅速かつ公平に実施するシステムの構築である。今後は実運用に向けて更なる研究・技術開発が期待されている。



左から、目黒教授、藤生氏、大原准教授

■佐々木遊太(教育部)が、「即席紙芝居」により、12月、第15回文化庁メディア芸術祭エンターテインメント部門審査委員会推薦作品に選ばれた。本作品は、その場で撮った子どもの写真などをテンプレートにはめ込んで語りを付ける、街頭紙芝居専用ウェブアプリケーションである。

■イ・ミスク(林研博士課程)とノ・ジュウン(姜研博士課程)がハーヴァード・イェンチン研究所2012-13 Visiting Fellow に選ばれた。このプログラムは、アジア各国の人文・社会科学分野の研究者及び博士課程の学生が、最長11ヶ月間、ハーヴァード大学の研究機関において研究を行うための奨学金である。

Books

『生命と機械をつなぐ知——基礎情報学入門』

西垣通 著/高陵社 2012年3月



基礎情報学は情報学環・学際情報学府で誕生した知だが、決して孤立点ではなくネオ・サイバネティクスという学問潮流の一部をなしている。ただし、既存の情報関連学問とはすこし毛色がちがうため、抽象的でわかりにくいという声があった。本書は、入門テキストとして、平易に基礎情報学のベーシックな概念を説明し、さらに情報社会のさまざまな具体的問題への応用面についても言及したものである。

『インターネット・デモクラシー——拡大する公共空間と代議制のゆくえ』

ドミニク・カルドン 著、林香里・林昌宏 訳/トランスビュー 2012年2月



自由と平等の実践様式を変え、公私の領域を組み換え、旧来のマスメディアを追い越めるウェブ。——現実の社会で排除されてきた発言や表現は、はたして世界をどう変えるのか。一方的な礼賛でも批判でもなく、細かな技術的知識も用いずに、世界規模で進行する実験の意味と、そこに潜む落とし穴を平易に解説しました。

『現代語訳 福澤諭吉 幕末・維新論集』

山本博文 訳・解説/筑摩書房 2012年3月



本書は、福澤諭吉の評論の現代語訳である。収録した「日藩情」は幕末の藩社会の実情を活写し、「瘦せ我慢の説」は新政府に仕えた勝海舟や榎本武揚を批判、「丁丑公論」は西南戦争を起こした西郷隆盛を擁護する。「士人処世論」は官僚の待遇は見かけほどいいものではなく、実業界で活躍する方が本人・国家双方に有益だと説く。当時の社会の実情を示す得がたい史料であるとともに、その斬新な切り口は今なお新鮮である。

『情報社会と共同規制』

生貝直人 著/勁草書房 2011年10月



企業や業界団体の行う自主規制と、政府による規制を組み合わせた新しい政策手法「共同規制(co-regulation)」の概念を軸として、欧州・米国における著作権・プライバシー・表現の自由をはじめとしたインターネット政策の最先端の課題への対応を論じていく。情報社会における国家と市場の境界の再構築、そして両者の協働に基づく社会秩序形成のあり方に広く関心を持つ方々に一読頂きたい。

